

第7章 人生の最期の時が幸せなら

在宅ホスピス「あおぞら」

「家で安らかに養生したい」と願う終末期の患者さんの希望を、地域ネットワーク方式の在宅ケアで実現されている、在宅ホスピス「あおぞら」。この所長、南吉一氏は私の妻の従姉の女医の南路子さんのご主人です。

日本ホスピス・在宅ケア研究会の講演会だったでしょうか、そこで妻の死後、本当に偶然にも南先生と再会しました。親戚としての付き合いはありましたが、それはまるで妻に導かれたような不思議な出会いといふべきものでした。

ホスピス（緩和ケア病棟）とは、ガン治療などによって心身ともに苦痛がある患者へ苦しい末期治療は施さず、人生の最期の時期を穏やかに迎えていただく入院施設です。先生は「死にゆく患者のメッセージ」訪米医学研修生と在宅ホスピスの人々」の著書があり、医学生と



谷莊吉先生



南吉一先生

一緒にアメリカのホスピスを訪問され、「あおぞら」でその報告会を幾度もされてきました。

南先生の勧めで、枚方の「あおぞら」で行なわれていた例会へ毎月参加するようになり、そこに参加されていた、今は亡き谷莊吉先生が会長の「大阪生と死を考える会」（遺族の会も兼ねる）へも毎月参加するようになりました。

谷先生はホスピス医として多くのホスピスや緩和ケア病棟に勤務。一方自分らしい死を迎えるために、「死の準備教育」に取り組まれていました。そして当時世界に比べて圧倒的にホスピス病棟の少ない日本で、病棟を増やす活動をされていて感銘を受けたのでした。

妻が闘病していた頃、ホスピスがもつとあれば妻も入っていたかもしれないと思い、真剣に南先生や谷先生から薫陶を受けました。この「あおぞら」での話し合いのような例会を大阪で作ったかどうかという提案が両先生からあり、大阪での「いのちと出会う会」が始まったのです。枚方へ行っていかなかったら「いのちと出会う」は生まれなかったかもしれません。この不思議なご縁には感謝しかありません。

日々命がけの長尾和宏先生

尼崎の長尾クリニック 院長 長尾和宏先生には、この「いのちと出会う会」で講演「在宅での

遺族の会

さらに神戸で行なわれていた、高木慶子シスターが会長の「兵庫生と死を考える会」へも通うようになりました。高木先生は末期闘病中の人々のスピリチュアル（魂の）ケアや、遺族として悲嘆のただなかにある人々の心のケアにかかわり、全国的な活動で東奔西走されておられます。さらにこの会の中にある「ゆりの会」は、子や配偶者を失なった遺族の会ですが、そこで私は講話をさせていただきました。また、大阪で別の遺族の会へも行くようになりました。当時少なかった遺族の会が日本全国に増えれば愛しい人を亡くして悲嘆の底にある多くの人々の心を救う場所になるとの夢を描きました。

しかし、多くの活動に参加しはじめて元気になってしまった私の姿を見せるのが嫌になって、遺族の会とは縁が遠のいてしまいました。また「兵庫生と死を考える会」の例会も別の活動と重

てくださいました。

地道に24時間体制の地域医療にかかわられ、いつ寝ておられるのかと心配するほどの東奔西走の日々を過ごされ心から尊敬申しあげています。妻の存命中にお会いできたら救っていただけたのではないかとというのが唯一心残りです。



長尾和宏先生



看取りと町医者が診た被災地への支援」をしていただき、そして「いのちと出会う会」100回記念大会でも「在宅医療といのちの絆」の講演をしてくださいました。

町医者という名前に誇りをもち外来や在宅医療、終末期医療に日々取り組まれています。在宅での自然な最期、尊厳ある最期をサポートする病院を建設され、予防医学にも力を入れておられます。さらにコロナ禍ではイベルメクチンを処方して多くの命を救われ、私の親友も先生に救われました。

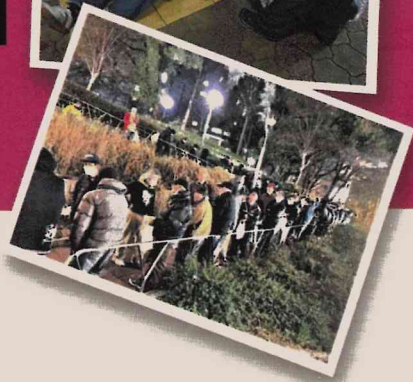
「平穏死10の条件」「ひとりも、死なせへんーコロナ禍と闘う尼崎の町医者、551日の壮絶日記」「病気の9割は歩くだけで治る」など25冊以上の著書があり、平成24年にはドキュメンタリー映画「痛くない死に方」「けったいな町医者」を製作されて、後者では主演者ともなられました。

先生のブログ「Dr.和の町医者日記」では、平成22年に私の寝袋配りに同伴いただき、読売新聞の記事を引用されながら、「冬の夜野宿者に寝袋無料配布…大阪の石黒さん 活動10年」の記事を書い

妻子の死から

ホームレス支援へ

石黒大圓



ひとつのおにぎりと寝袋がひとりの命を救う

